

北社会ニュース 第37号

2007年10月22日

発行者：鈴木杜夫

TV等で映像を御覧になられた会員もおられるかと思いますが20-21日の両日は江戸時代から継承される“山車行列の川越祭り”でした。私が営んでいるそば屋の真向いが市役所の駐車場です。祭りの期間中この駐車場は“山車”の集結場になります。午前10時から午後10頃迄市内の中心地を歩行者天国にし、山車はお囃子とともに大勢の人達によって引き回されます。両日で百万人超の観光客を関係者は目標にしていたましたが、今年は天候にも恵まれ達成されたようです。地の利を得ている私のそば屋も今年も両日で約600人のお客様にご来店いただきました。手打ちそば、一回毎に16人前作ります。大盛りのお客様もおられるので40数回打ちました。一回の所要時間は40分位です。そばを打つだけの週末でした。仕込みの予定表を作成している時、これだけやれる体力と気力を今年も持ちえるだろうかと不安になります。でも、やるぞ！と自分に言聞かせて秋の星座を見上げながら店に向かった三日間でした。今、日曜日の深夜です。自分達なりの達成感のせいか、疲労感はありません。そば打ちとそば茹でだけの私のお祭り、それでも天におられるどなたかが“眼の保養”をお恵み下さりました。祭り初日の夕方、お客様が少なくなった時間帯にアメリカ人の若い母親と幼稚園児にご来店いただいた。母子ともとても可愛かった。お嬢ちゃんが私のそば打ちをガラス越しに真っ正面で見学していた。その内、母親が子供を呼びに来て二人になった。私の手先の動きを見たいのか二人とも少しづつ前かがみになっていったらしい。ふっと眼を上げると上部のボタンを外した母親のムネが見えた。やわらかそうな二つの丘が眼の前に。祭りのご褒美でした。

(1) 本日、第256回北社会

講師：針生承一氏（高13回） 建築家

演題：「際的美学—Aesthetics of interface—」

私と同期の早坂昭夫君の出席連絡時のコメントを転載させていただきます。

「針生建築研究所のホームページを拝見しました。各ページの構成が極めてシンプルで要を得た設計であり、“際”のフィロソフィーが生かされた一例と理解しています。ちなみにエレクトロニクスにおける“設計”の完成とはこれ以上削除するものがなくなった状態であろうと考えてきました。

共通点（人間とのインタラクション）と相違点（自律機械）がありそうでご講演を楽しみにしています。」

(2) 来月の北社会

11月19日（月）午後6時

講師：高橋長偉氏（高11回） 宮城県県議会議長・「自民党県民会議」所属

今春、議長に選出されました。私と同期ですが体力も若く、フットワークも軽く

「現場主義」を貫いています。“みやぎのあす”を語って貰おうと思っています。

(3) 「PSA検査値」グレーゾーン顛末記

前立腺がんは男性にとって気になるがんの一つです。PSA検査というのは血液中に含まれるたんぱく質「前立腺特異抗原」の濃度を調べる検査。前立腺がんになると値が上昇するため敏感な指標として活用されている。私は頻尿なので数年前から川越市の人間ドックで受検し昨年までは値が血液1ミリリットルあたり2ナノグラムで問題が無かった。それが今春の検査では4ナノグラムに上昇し、グレーゾーンと言われ、がんの有無の検査を勧められた。多くの友人に聞いてみた。進行が遅いし、いわゆる「おとなしいがん」だから様子見をしたらと言いつつ友人もいたし、“4”程度なんて深刻に考える必要もない範囲と酒を呑みながら大声で叫んでくれた友人もいた。そんなことが多少気掛かりになっていた7月、仙台で亡父の墓参りに行った。墓石に刻まれた「行年六十七才」という文字が強く心に響いた。オヤジは胃がんだった。病死の数年前、東北大学・黒川内科より胃がん検診が必要と判断されたが、多忙を理由に受けず、その内苦痛に耐えられなかったのかやっと入院手術を決断した。オヤジの説明によると胃潰瘍だった。術後、私が手術室に入るよう執刀医に呼ばれ、切除された胃を見せられ「胃がんで半年生きられる可能性は30%」とまさに青天の霹靂だった。66才のオレが死ねば行年六十七才、ごちゃごちゃ言わずに検査を受けようと決め、帝京大学附属病院を紹介いただいた。

先月の北社会の翌週、26-28日検査入院した。そば屋は今年初めての連休、こんなことで連休なんて、もっと楽しいことがないのかとぶつぶつと独り言を繰り返しながら。検査の正式名称は「経直腸的前立腺生検」というそうです。MRI・呼吸機能・胸部レントゲン・心電図・血液・血圧・問診等の事前チェックがあり、“WITHIN NORMAL LIMITS”で手術OKとなった。骨髄麻酔後、肛門から超音波診断の機械を挿入し、前立腺の組織を12箇所から採取された。約50分間で終了、痛みはゼロだった。仰向けにされ、両足を広げられ、足首を固定され、妊婦の出産時のご苦労に頭が下がるという余裕(?)でした。術後の下腹部の圧迫感そして血尿・血便等説明書に記載されている通りの経過でした。時間はたっぷりあった。本は一冊だけ持参した。心の戦友(?)江田五月さんの「出発のためのメモランダム」-毎日新聞社刊-をゆっくり読んだ。二ヵ月遅い昭和16年5月生れの五月さん、60年安保闘争その他、共感できる箇所が多かった。参議院議長としての舵取りが期待できるなど、天井を見上げながらエールを贈った。でも、本当に退屈だった。食事制限もあり、腹がへり、その上粗末(?)な食事の連続でした。勿論、禁酒でした。退院の朝ビックリする数値を看護師から聞かされた。血圧測定の結果、120/58でした。十数年前の数値だった。150-160/80-90が最近の数値だったから、安静にして食事制限して酒を呑まねば「オレの身体はまだまだ若く生きている」と自己満足してとても嬉しかった。そして、多くの患者さん達を目にした。健康で生活できている“しあわせ”が心に刻み込まれた。二週間後の10月10日生検結果報告を聞きに行った。担当医があっさりと「がん細胞は検出されなかった」と。根拠は何も無かったが、がんである確率は30%程度とそれなりの覚悟はしていた。それも杞憂だった。嬉しいもんですね。10月10日、43年前の東京オリンピックの時のような抜けるような青空では無かったが、心ははればれ、何故か「助かった、助けていただいた」と感謝の瞬間だった。人は虚空から来て虚空に帰る旅人。そう思って空を見上げました。